

アメリカ禅センター滞在を終えて

—— 帰国報告 ——

福田 智昭

私の師、善光寺方丈の御配慮を頂き、去る六月四日、日本を出発。二日間は、善光寺方丈御夫妻を始めとする禅センター訪問の御一行とご一緒させて頂き、善光寺育英会留学僧として、その後も現地に留まり、ロサンゼルス禅センターで勉強を続けておられる遠藤博因師と行動を共にさせて頂き、各地を見学した後、ロサンゼルス禅センターに約三カ月間滞在し、八月二十

七日、帰国到しました。

ロサンゼルス禅センターでは六月中旬に慧玉ウェンディー師の主管就任の晋山式が行なわれ、私も典座の一員として展待の仕事に従事し、一応の役割をまっとうさせて頂きました。その後、約二週間を、マウンテン禅センターに赴き、修行中のアメリカ人と寝食を共にし、貴重な体験をさせて頂きました。ロサンゼルス禅センタ

ーとは異なり、自然につつまれたマウンテン禅センターは、メンバーのアメリカ人も若い人が中心で、日本の禅や文化に対する関心も旺盛で、今後のアメリカ禅の可能性を感じました。ロサンゼルス禅センターに滞在中は、曹洞宗北米布教總監の秋葉老師の要請もあって、禅宗寺の施食会の法要を始め、葬儀、その他法要に随喜させて頂き、誠に有意義な三カ月間を過ごすことが出来ました。以下、その間の体験を簡単にまとめ、帰国報告と致します。

(一) ロサンゼルス禅センター(ZCLA) での生活

ロサンゼルス禅センターは、市の中心街を離れたNormandie Ave.にある。メキシカンの人々の住む街の続きにあり、少し足を運べば、朝鮮街(Korean town)も近い。自然食を中心に取り扱うスーパー・マーケットもあり、日本

食が一種のブームのせいもあり、日本人の日常生活に必要な食品が殆どすべて揃っている。

それらの多くは、日本からの輸入ではなく、アメリカ産のもの、あるいはその加工品であるが、日本のものと何等変わりない味のもので、異和感はなかった。日本食が、ヘルシー食として、いかにアメリカ人にもてはやされているかが、感じ取られるものであった。

ロスの禅センターでの生活は、特別の場合を除き、各自が自炊をし、僧堂のような共同生活ではない。一日の生活は、朝五時の振鈴に始まり、坐禅、朝課の後、各自、朝食をとり九時より作務に入り、戸外、屋内の掃除、建物の補修工事等々、一日の予定によって行なわれる。昼食後の午後は自由な時間である。

夜は、夜坐があり、止宿の者の他、日中、会社勤務やそれぞれの仕事を持った人々も集まって坐禅に参加する。一炷の夜坐の後、主管の法

話 (Dharma talk) があり、質疑応答なども行なわれる。以上が大雑把に見た一日の行事の流れである。週末の土曜、日曜日は参禅会のようなものが行なわれ、参加者は昼食を共にする。このセンターは、単に禅の修行道場であるだけではなく、超宗教的な人々の交流の場でもある。

例えば、ユダヤ教のラビ (教師) のユダヤ教の聖典の解説などが行なわれ、私達も聴講した。その他にもいろいろな講座が開設される。このセンターは、総合的宗教文化の交流や集いのためにも利用されるのである。主管の慧玉師はユダヤ教のラビやキリスト教の神父などとの交流も行なっているようである。当センターの坐禅の際も、独参や考案も日常的に行なわれ、臨済禅の方法も採り入れられている。この点は、日本の禅院とは異なり坐禅が日常的なものとして人々に参加の機会が与えられ、各自の生き方の上で、真剣に禅を求めている様子が、短い滞在

によっても理解できたように思う。

滞在中の六月十四日、慧玉師の晋山式が行なわれ、全米各地の故前角博雄老師の法嗣の弟子や法孫の方々が随喜された。私はその展待のためにアメリカ人数名と共に典座の役に就き奉仕する機会を与えられた。日本とは異なり、いわゆる懐石料理的なものではなく、野菜を用いた、いかにもアメリカ的な料理であった。私は私で精進寿司、のり巻、てんぷらなどを作り供した。永平寺大庫院にいたころの料理の垂流的なものであったが、アメリカ人にとって物珍らしい物もあったのか、ある程度喜ばれたようだった。晋山式は中庭に舞台を設けて行なわれた。また七月には首座法戦式つまり Dharma Battle、日本禅院の形式化された儀礼的傾向の強い様式とは異なり、各自の日常の宗教体験から発生する疑問、疑義を質し合う問答本来の意義が継承されたもので、故前角老師が開教体験の中で苦



勞の末に会得された方法を採り入れられたものが伝承されたものだと思う。

(二) マウンテン禅センター(ZMC)での 体験

シティー・センターで約二カ月を過ごした後、八月初旬、先輩の遠藤博因師に伴なわれ、百数十マイル離れたマウンテン・センターに赴き、約二週間滞在し、アメリカ人修行者や参禅の人々と生活を共にした。マウンテン・センターの方はかなりの高地にあり、境内の背後には高い岩山がそびえ立っている。松林に囲まれ、乾燥地帯にあるため、ところどころ岩や大地が露出しているが、境内は整地されている。自然のまっただ中で市塵をさけて静寂の中に建造物がある。このような人里離れた場所に電気を引き、自然の湧き水を生活用水としている。この場所に道場を開かれた前角老師の御苦労が偲ばれ

た。

当然、その事業を理解され、多くの資助された中でも、善光寺、黒田御老師の支援の大きさが実感された。野性の動物が多く棲息し、日中でも鹿が活動しているのを見た。リスが枝々をとり廻り、私の目の前で鷹がリスをその鋭い爪でつかみ取り飛び去るショッキングな光景も眼にした。夜にはマウンテン・ライオン(クーガー)が、センターの回りにも出没すると言う。月夜には遠くでコヨーテか山犬の吠き声も、夜陰の中で耳にした。近くの街からは二、三十マイルぐらい離れているから、車なしでは絶対に生活はできない。ちょうど夏期休暇のため、大学生や、若い勤め人で休みを取って安居に参加している人もいた。総員二十名が生活し、修行に努め、前角老師の法嗣で主管の天心フレッチャー師と夫人の清泉師が中心となって運営している。安居や摂心の際は会員はそれぞれいく

らか会費を払って参加し、僧堂に準じた生活を実践している。各自作務を行ない、可能なものはすべて手作りで、テーブル、椅子等、生活用具も木工作務で作ってしまう。焼香机、木版なども手作りである。私は滞在中、作務の中で典座を担当し、日本料理を手始めに、ボタ餅の類を手掛け、帰り際には残りの小豆を使い水羊羹を数本作ってきた。拝登の際、私は温かく迎えられる、すぐに皆んなと意志を通じることができた。二週間もあつという間に過ぎ去ってしまった。

振鈴は午前四時二十分で、坐禅、朝課、作務と続き、昼食後は坐禅、晩課となっており、夜は夜坐と僧堂のような生活を送っている。独参も行なわれ、それぞれ熱心に禅の奥義を究めようと真剣である。中には自分の全財産を捨て出家してサンガの一員となった人もいるようである。日本の禅が、故前角老師の長年の苦勞によ

って、この地に根づき、多くの人々がそれぞれの意志によって安居や撰心に参加し、あるいは完全な出家者のな生活を送り、日々精進している姿を見るにつけ、先駆者、前角老師の偉大な業績を実感し、感動を抑えることができなかつた。

二週間が過ぎ、遠藤師のお迎えを頂き、ロスのシティー・センターに帰ることとなり、別れを告げると、涙を眼に浮かべ別れを惜しんで下さる人々もいた。主管の天心師からは、来年必ず再訪し、共に修行に精進するよう薦められた。私にとつて感動の旅であり、楽しい二週間の滞在であった。

(三) まとめ

アメリカ禅仏教会に大山のようにそびえ立つ前角博雄老師が、遷化されて以来、法嗣、法孫のアメリカの人々は、どのように法を継承し、

維持発展させるために、日々どのような活動を展開しているかが私にとって最大の関心事であった。この度、善光寺方丈様の御配慮によって、三カ月間の禅センターでの貴重な体験をさせて頂けたことは、私にとって幸甚この上ないことであり深く感謝申し上げたい。

シティー・センター、マウンテン・センターとそれぞれの置かれている地域の環境にに応じて、その維持発展に努力している様子を知ることができた。強力、且つ熱意に燃えた中心的な指導者が遷化されて以来、これからの禅センターのあり方において、まさに現在では、最も重大な過渡期にあると言えるのではないかと思う。時代的、社会的、文化的環境に応じて、宗教は変容し、展開して行くのはインド仏教から中国仏教へ、中国仏教から日本仏教へと移行する過程における変容、発展の歴史を概観しても分る通りである。しかし、見失ってはいけない根

本の仏教のありようがある筈である。アメリカ禅の実相を管見しただけでは、全体を論じる訳にはいかないが、前角老師の播き育ててこられた禅が、今後どのように発展していくか、私達、日本仏教者の立場から注意深く見守り、協力し、手を結び、その発展に力となって行くべきだと思ふ。前角老師の存在は、直接の弟子方のみでなく、孫弟子の方々にとっても、カリスマ的尊崇の対象であり、アメリカ宗教界にとっても稀有な存在として認められているのではないかと思ふ。センターのブック・ストアには老師の伝記が並べられていた。また、この前角老師の偉業を力強く支えてこられた善光寺方丈様に対する、前角老師の法嗣の方々の期待に燃えている熱いまなざしを感じざるをえなかった。